

## 34 看護部

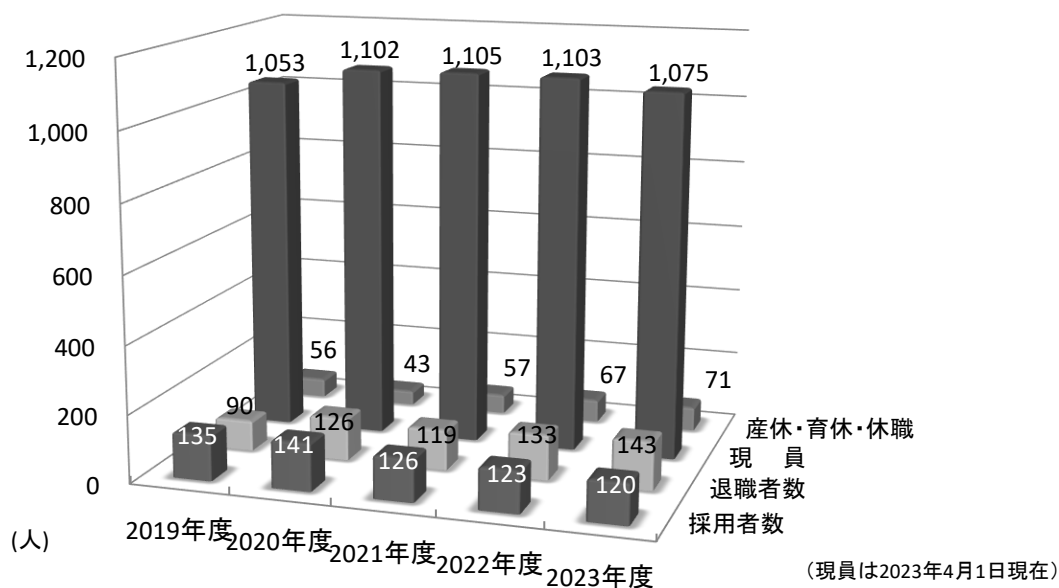


看護部は“SWEET”【S(sincerity)：誠実な行動、W(warm)：あたたかい対応、E(evidence)：根拠ある実践、E(ethics)：倫理的感性、T(technique)：確かな技術】をモットーに、看護職員一人ひとりが自己の役割と責任を果たすべく看護業務に取り組んでいる。看護職員の確保・定着に努めることで在職者の平均勤務年数も年々増え、産休・育休を取得して働き続ける職員も多い（図34-1、34-2）。

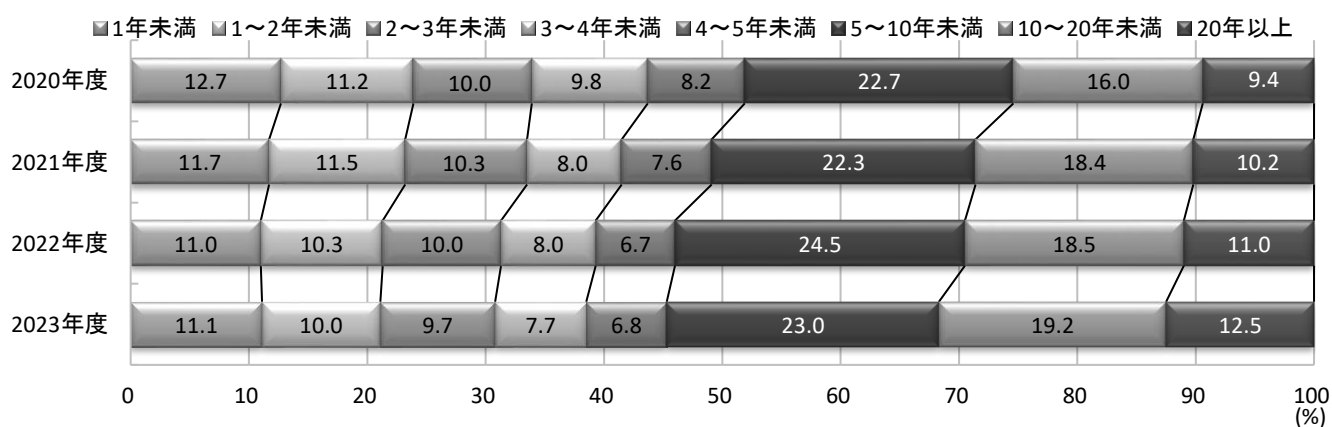
重症度、医療・看護必要度において、A項目は急性期医療・処置（ME機器の装着・管理、薬物の投与・モニタリング等）を、B項目は患者さんの生活支援状況（動作制限や認知度による介助等）を、C項目は手術等の医学的状況を評価している（図34-3、34-4）。患者さんの観察度、生活の自由度（図34-5、34-6）のデータから依然として全病棟で常にB項目の点数が高く、日常生活援助に多くの看護力を費やしている状況が見える。特定機能病院の7対1入院基本料の施設基準である「重症度、医療・看護必要度Ⅱ」の判定基準28%以上を維持するためには、医療処置を必要とする患者さんの増加への取り組み、また、生活支援が主たる患者さんの早期退院（在宅・転院）が必須となる。

「地域完結型」の医療・看護提供を目指し、入院前から退院支援に取り組み、当院での医療処置が終了した患者がスムーズに退院・転院できるよう、医師・メディカルスタッフをはじめ、地域の医療関係者との連携を強化していく。さらに在院日数の短縮により、医療処置・ケアニーズの高い患者さんが外来へとシフトしていることから、在宅療養指導や看護外来の充実を図り、患者支援強化に向けた取り組みを継続している（表34-7）。今後も入院前から退院に向け、積極的に介入し、継続看護の更なる質向上を目指す。

34-1 看護師数の年度別推移



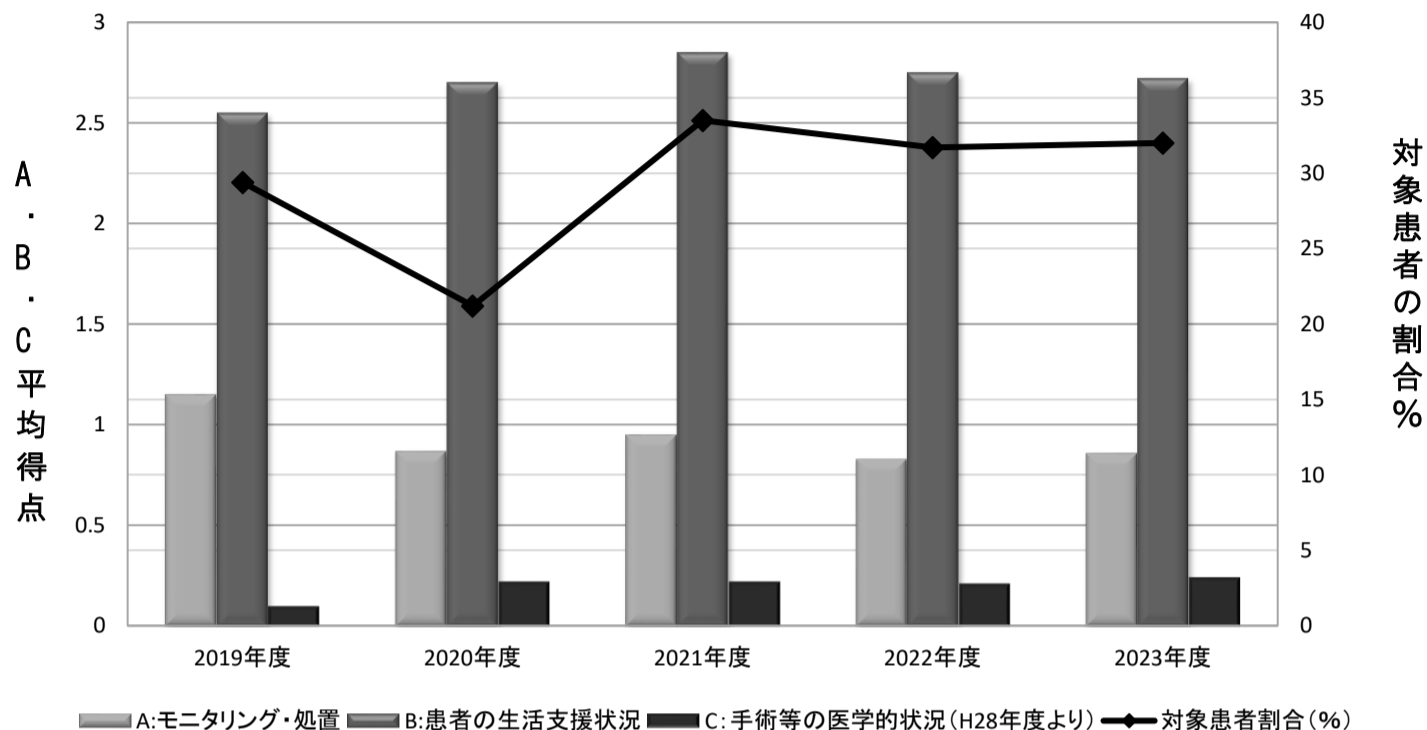
34-2 看護師当院在職年数別の年度別構成比率（各年度4月1日現在）



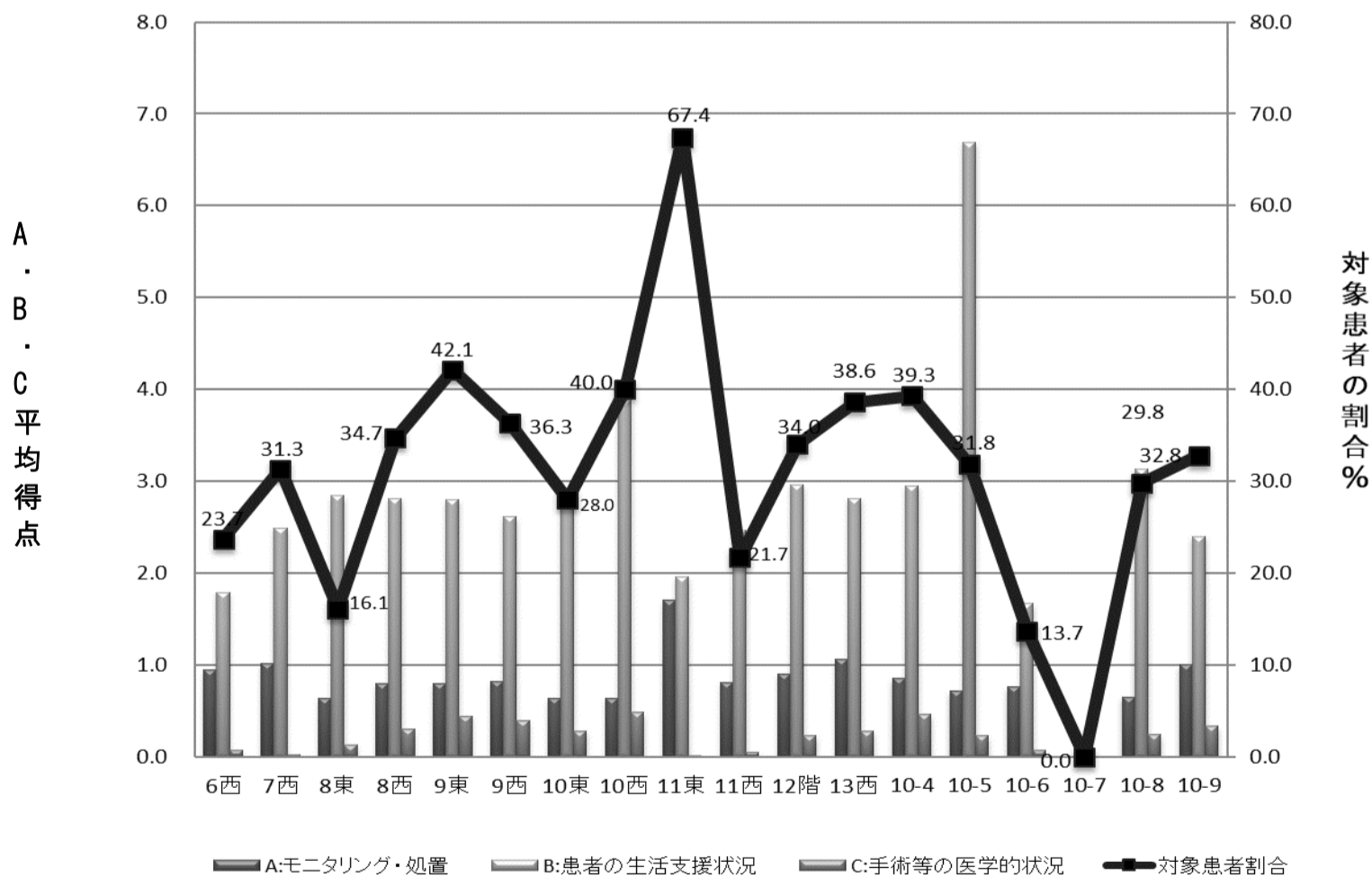
34-3 7対1対象病棟における重症度、医療・看護必要度平均得点の年度推移

対象患者 ・ A得点2点以上かつB得点3点以上  
 ・ A得点3点以上  
 ・ C得点1点以上

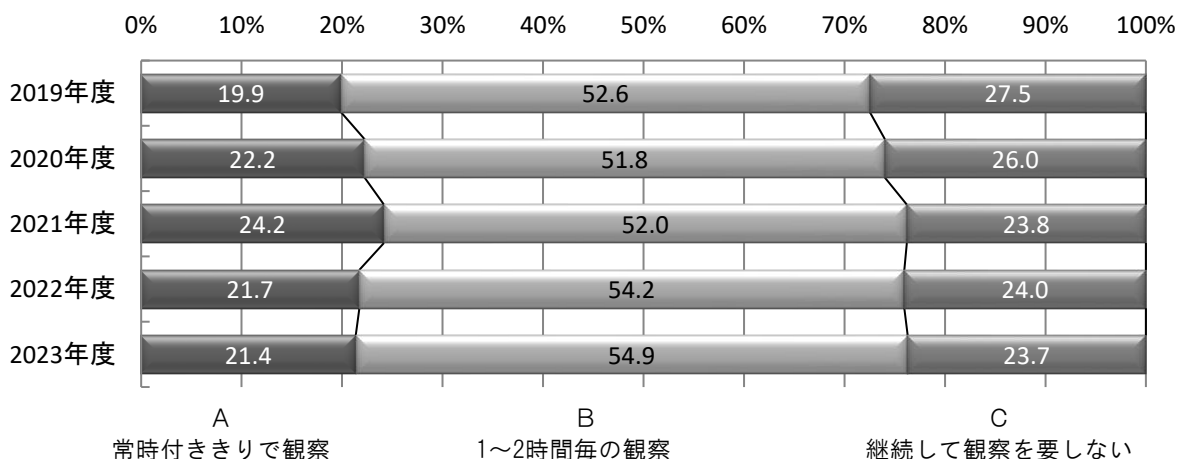
※2016年度診療報酬改定により項目の変更、C項目の追加あり。  
 ※2018年度診療報酬改定により項目の変更、対象患者の基準の変更あり。  
 ※2020年度診療報酬改定により、C項目の算定日数の変更あり。



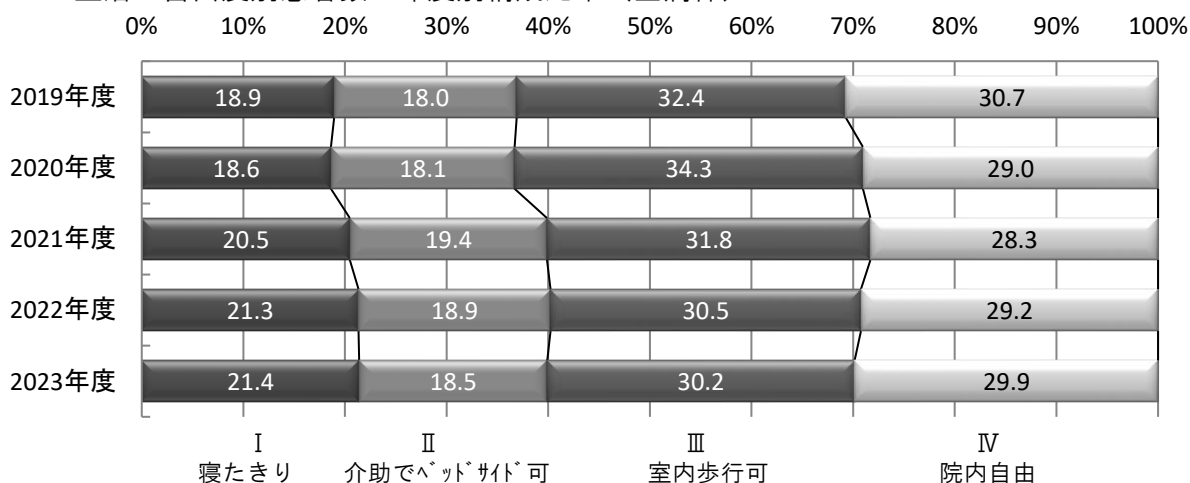
34-4 2023年度 7対1対象病棟別重症度、医療・看護必要度 項目別平均得点および対象患者割合



34-5 看護観察度別患者数の年度別構成比率（全病棟）



34-6 生活の自由度別患者数の年度別構成比率（全病棟）



34-7 年度別外来看護活動状況

(件)

区分		2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
療養指導	在宅療養	3,922	5,704	7,453	8,012	7,514
	自己注射	1,088	939	841	858	1,085
	自己腹膜灌流	5	11	1		2
	酸素療法	73	44	40	32	52
	人工呼吸	177	175	117	131	83
	中心静脈栄養	55	64	42	30	29
	成分栄養経管栄養	63	86	222	35	9
	自己導尿	49	71	93	56	84
	糖尿病透析予防	163	111	99	102	89
がん化学療法	59	76	164	287	591	
看護外来	造血幹細胞移植看護	586	523	559	469	550
	不妊症看護	76	82	72	39	
	フットケア	749	540	566	455	391
	糖尿病看護	453	333	262	180	183
	慢性病看護	526	370	565	598	573
	こども看護	11	122	103	81	66
	がん看護	191	871	438	216	270
	周術期看護	91	89	42	67	48
	リンパ浮腫	205	157	177	207	209
	ストマケア	1,072	932	966	1,063	1,071
母乳外来	100	96	80	38	47	
マタニティヨガ	51	2		45	63	
合計	9,765	11,398	12,902	13,001	13,009	

※2019年度より不妊症看護の項目を追加